世界名作劇場

プリンセス

小公女セーラ

『また逢う日まで』

第 46 話

提供 ハウス食品工業

制作 日本アニメーション
フジテレビ

脚本中西隆三

登場キャラクター（第四十六話「また逢う日まで」）

- セーラ・クルー
- ミンチン院長
- アメリア先生
- ベッキー
- ピーター
- ロッティ
- アーメンガード
- ラビニア
- ジェシー
- ガートルード

クリスフォード

カーマイケル

パン屋のおばさん

アンヌ

シーザー（猫）

ジャンプ（ポニー）

ボナパルト（オウム）

1 ミンチン女学院・遠景

雪はやみ――クリスフォード家と並んだ屋根屋根の積雪が、明るい陽光にキラキラと光っている。

――何処からか聞える教会の鐘の音。

2 同・遊戯室

天井まで届きそうなモミの木が置かれ、ラビニア、ジェシー、ガートルード、アーメンガード、ロッティ以下の女生徒たちが、ガヤガヤと飾りつけをしている。

脚立のてっぺんで、銀の星を飾るラビニアとジェシー。

ラビニア「みんな急がないと間に合わないわよ」

ジェシー「誰か、次の星わたしてェ！」

その下で、椅子に立ったアーメンガードが枝に飾る綿

の雪を、ガートルードがひょいと横取りする――

アーメンガード「あ、私の雪とっちゃ嫌よォ」

ガートルード「いいのよ、こっちの方が足りないんだから！」

その下で、ロッティたちが下枝に銀紙細工をとりつけている――

ロッティ「ああん、うまくくっつかないよォ」

ドアが開き、見違える程活発になったアメリアが入って来る――

アメリア「さあさあ、皆さん、クリスマスの飾りつけは進んでいますかァ？……イブは今夜なんですよォ！」

一同「はあい……」

3 同・院長室

女生徒たちの騒ぐ声が、微かに聞えている――

暖炉の前に――肩を落して椅子に掛けているミンチン。髪はほつれ、虚ろに暖炉の火をみつめて動かない。

ドアが開き、アメリアが入って来る。

アメリア「まあ、お姉様、ここにいらしたんですの？」

ミンチン、たいぎそうに振返る

ミンチン「ああ……アメリア……」

アメリア「困りますわ。クリスマスの支度で忙がしいと云うのに、いつまでも考え事ばかりなさっていて……」

ミンチン「（弱々しく）アメリア……私、なんだかもう魂が抜けてしまったような気がして……この学院の経営も、もう誰方かにお願いしようと……」

アメリア「なにを仰言ゃるのよ……そりゃ、ダイヤモンド鉱山の後継ぎと決ったセーラさんを手離してしまったのは残念ですけど、まだこの学院の経営が駄目になった訳ではありませんわ。さ、元気を出して！」

その時、ノックの音――

アメリア「どうぞ！」

ドアが開き、モリーが顔をのぞかせる。

モリー「あのォ、玄関にお隣りの御主人が、弁護士さんと……」

アメリア「なんですって？！」

モリー「この学院の事で、お話合いしたい事があるとかで……」

呆然と顔を見合せるアメリアとミンチン。

ミンチン「アメリア……ま、まさか、セーラさんの事で、私たちを裁判に……」

アメリア「とにかく、お逢いしてみなければ……さ、心配しないで」

4 同・玄関ホール

ミンチンとモリーを従えて出て来るアメリア、玄関ドアを開ける。

立っているコートのカーマイケルと、ステッキのクリスフォード——そしてその後ろに、毛皮のコートを着たセーラが立っている。

アメリア「まあ、セーラさんまで……」

セーラ「はい、アメリア先生……」

クリスフォード「(微笑) 実は、この子からの申し出で、是非お逢いした上でお伝えしたい事が起りましてな」

アメリア、ミンチンと顔を見合せる。

ミンチン、不安に頷く——

アメリア「どうぞ……」

廊下の奥で——窺っていたラビニア以下の女生徒たちが、ぱっと引込む。

5

同・廊下

玄関の方から、クリスフォード、セーラ、カーマイケルを案内して来るアメリアと、続くミンチン――先に立ったモリーが、応接間のドアを開け、一同次々に中へ。

×　　×　　×

廊下の一方から、どっと現われるラビニア以下の女生徒たち――　見送って顔を見合せる。

ガートルード「すっごい！……見た？　セーラのコート、ミンクよ！」

ジェシー「だけど、あの人、一体なにしに乗り込んで来たのかしら？」

ラビニア「多分、この学院を買い占めに来たのよ。あり余るダイヤモンドで。復しゅうのためにね」

女生徒たち「えええッ……」

アーメンガードとロッティ、心配そうに顔を見合せる

6 同・応接室

アメリア「な、なんですって？！」
ミンチン「で、では、この学院にご寄附を？！」
　椅子に掛けたミンチンと、脇に立つアメリアが、呆然と見返す。
　テーブルを挾んで、セーラと並んで椅子に掛けたクリスフォードが、微笑で頷く。
クリスフォード「さよう……この子の、たっての希望でしてな」
　こっくりと頷くセーラ。
　ミンチンとアメリア、凝心で顔を見合す。
クリスフォード「カーマイケル君……」
　カーマイケル、心得て鞄から紙片を取出し、ミンチン

に渡す――

カーマイケル「イングランド銀行の小切手で……十万ポンドです」

驚愕して小切手をみつめるミンチンと、脇からのぞくアメリア――

ミンチン「ジュウ……ジュウ……十万ポンド……！」

アメリア「お姉様！」

卒倒しかかるミンチンを支え、慌ててテーブルの水差しからコップに注いで、飲ませる。

クリスフォード「（微笑）お受け取り……頂けるでしょうかな」

アメリア、ミンチンに水を呑ませながら、振向いて口走る――

アメリア「も、勿論でございますわ、クリスフォード様！……ね、お姉様！……お姉様!!」

ミンチン「ア、アメリア……」

ミンチン、何度も頷いてみせる。

クリスフォード「所で、ひとつふたつ、この子からのお願いがありましてな」

アメリア「ええええ、なんでも仰言ゃって下さいましな。ねえ、お姉様！」

ミンチン「そ、その通りよ、アメリア……」

セーラ「実は、ベッキーの事なんです」

アメリア「え、ベッキーのこと……？」

7

同・屋根裏部屋

置かれた儘の小馬の玩具や、オカリナ、本、エミリーを抱え上げるベッキー。

ベッキー「さ、エミリーちゃん。セーラお嬢様の所へお届けしてあげるからね」

更に、セーラの父母の写真額を取上げる。

8

同・一階廊下

応接間のドア前で窺っていたラビニア以下の女生徒たちが、ぱっと逃げる。

同時にドアが開き、アメリアが飛び出して来ると、左右に呼ぶ。

アメリア「ベッキー！……ベッキー！」

×　×　×

階段を――エミリーや写真額を抱えて降りて来るベッキー、その声にはっとなる。

ベッキー「は、はい、アメリア先生……」

×　×　×

アメリア「あ、ベッキー……！」

アメリア、気づいて駆け寄って来る。

アメリア「ベッキー、驚かないで頂戴……すばらしい運が、あなた

の前に拡がって来たのよ」

ベッキー「えッ、運でございますって？」

アメリア「そうよ。あなたはね、お隣りのクリスフォード様のお邸に引取られて、ダイヤモンド・プリンセスのお傍でおつかえする事になったのよ」

ベッキー「えッ、ほ、ほんとでございますか」

×　　×　　×

その時、ドアから出て来るセーラの姿。

×　　×　　×

ベッキー「お、お嬢様……！」

ベッキー、夢中でセーラに駆け寄る。

セーラ「ベッキー……！」

セーラも、思わず駆け寄る——

ベッキー、見る間に嬉し涙が溢れ出る。

ベッキー「まあ、お嬢様、ご立派におなりになって……」

セーラ「ベッキー……」

ベッキー「私、ラムダスさんから、お嬢様のおことづけを頂戴しましたです……こんな私を忘れないでいて下さったなんて、それだけでも、涙が出る程嬉しかったですのに……私を、お嬢様のお傍に……」

セーラ「ベッキー……嬉しいのは、私も同じよ……私たち、また一緒に暮せる事になったのよ」

ベッキー「お嬢様……」

ベッキー、はっと気がつく。

ベッキー「あ、これ、お嬢様にお届けに上ろうと思っていた所で……」

セーラ「まあ、有難う、ベッキー……」

セーラ、エミリーと写真額を受取る――

× × ×

離れて、事態に顔を見合せるラビニア、ジェシー、ガ

ートルード――
心配そうに見合うアーメンガードとロッティ――
囁き合う女生徒たち――

×　　×　　×

応接間のドアから――ミンチンと、ステッキをついたクリスフォード、続いてカーマイケルが出て来る。
クリスフォード「では、あの子に関して、お願いしたように計らって頂けるのでしょうな」
ミンチン「(明るく)ええええ、勿論でございますとも、クリスフォード様」
うって変ったハシャギようで、女生徒たちに呼びかける――
ミンチン「み、な、さァーん……!」
ラビニア以下の女生徒たち、怪訝そうに集って来る。
ミンチン「さ、今日は、みなさんが、びっくりするようなお知らせ

があるんですよォ」

顔を見合せるロッティたち――

ミンチン「こちらの、セーラさんは、このミンチン学院をおやめになった訳では、ないのです……」

女生徒たち、怪訝――

ミンチン「その証拠に、セーラさんは、以前通り、皆さんと一緒に、この学院でお勉強を続けたいと、お申し出になられたのですよ」

女生徒たち「えええッ……」

ミンチン「(制して)ただし……」

静まる女生徒たち――

ミンチン「セーラさんは、この学院に寄宿する訳ではありません。お隣りのクリスフォード様のお邸から、通われる事になります……その点、みなさんもよろしくね」

女生徒たち、わっと歓声をあげてセーラに殺到し取囲

む――

ロッティ「わあい、またセーラ・ママと一緒にお勉強出来るんだい！」

アーメンガード「セーラ！　私、あなたの事が心配で心配で……よかった（涙ぐむ）」

セーラ「ありがとう、アーメンガード……ありがとう、ロッティ……それから、ありがとう、みなさん……」

×　　×　　×

離れて、取残されているラビニア、ジェシー、ガートルード――

ガートルード「ね、ラビニア……セーラの所へ行きましょうよ」

ジェシー「ね、行かないなら、行っちゃうわよ」

ガートルードとジェシー、ぱっとセーラを囲む女生徒たちの中へ走り込む。

ガートルード「セーラ、よかったわね！」

ジェシー「また一緒に遊べるわね！」

×　　×　　×

更に取残されたラビニア、遂に耐え切れず、セーラを
囲む輪に近づく――
はっと見るセーラと、女生徒たち――
ラビニア、立停り、じっとセーラを見る。

ラビニア「おめでとう、セーラ……」
セーラ「あ、ありがとう、ラビニア……」
ラビニア「私……あなたさえよければ、仲良しになってあげてもよ
くってよ」
ミンチン「ラ、ラビニアさん！」
セーラ、優しく微笑を返す。
セーラ「私……本当云うと……この学院に来た時から……あなたと
仲良しになりたいと思って来たのよ」
セーラ、手を出す――　ラビニアも微笑を浮べ手を出

すと、握手をする。

アメリア「さあさあ、皆さん、クリスマスのお祝いは、セーラさんとご一緒にする事になりましてよォ」

どっと歓声をあげる女生徒たち――

その一方で、クリスフォード、そっとカーマイケルと微笑を交す――

（中　C　M）

9 ミンチン女学院・全景

ミンチン女学院・全景、鳩たちが舞い飛ぶ。
——流れるクリスマス・カロル。

10 同・遊戯室

アメリアがオルガンを弾き——
クリスマス・ツリーを囲んだセーラ、ベッキー、アーメンガード、ロッティ、ラビニア、ジェシー、ガートルード以下の女生徒たちが、そのクリスマス・カロルを唄っている。
その中で、思い切り上機嫌で、両手で指揮をとっているミンチン——
その一方に、椅子に掛けたクリスフォードが、微笑

で見守っている。

×　　×　　×

唄が終り――真っ先に拍手するミンチン。

ミンチン「さ、みなさん、クリスマス・パーティのはじまりですよォ！」

歓声をあげる女生徒たち――

ミンチン「（呼ぶ）モリー！……ジェームス！」

ドアが開き、首から下だけサンタクロース姿にふんしたジェームスと、モリーが入って来る。

ミンチン「ど、どうしたんです。そんな半ぱな恰好で」

ジェームス「へ、へえ……実は、お隣りから大変なものが届いちまって」

モリー「とに角、ここへ運んで貰うように云ったんですけどね」

ドアから、クリスフォード家の老若二人のインド人が、巨大なクリスマスケーキを運び込んで来る。

どよめく女生徒たち

ミンチン「まあ……！」

アメリア「お姉様……！」

クリスフォード「（微笑）この子からの、クリスマスの贈物でしてな」

セーラ、微笑で頷く――

ミンチン「まあ、セーラさん……！」

女生徒たち、どっとテーブルに置かれた巨大なクリスマスケーキを取囲む。

その時、入って来るラムダス――

ラムダス「御主人様……！」

クリスフォード、ふっと振向く――

ラムダス、近づくとクリスフォードの耳許に何事か囁く。

頷いたクリスフォード、セーラの方を向くと、椅子か

ら立上る。

クリスフォード「セーラ……！」

セーラ、テーブルから振返る。

セーラ「はい、小父様……（近づく）」

クリスフォード「君へのクリスマスプレゼントが届いたようだ。表へ行ってごらん」

セーラ「まあ……！」

ロッティ「ね、ね、セーラ・ママ、私たちも見に行っていい？！」

セーラ「ええ、勿論よ、さ、行きましょう」

女生徒たち、わっとセーラを囲むと、ドアを出て行く。

急いで続くアメリアとミンチン――

クリスフォードとラムダス、顔を見合せると、ゆっくりとあとを追う。

11 同・玄関前

出て来るセーラと女生徒たち——一瞬、なにかを見
て、愕然と立尽す。

セーラ「まあ……！」

×　×　×

停っているポニーの馬車——背を向けてそのポニー
の首をなでているピーターと、脇に立つカーマイケル。

×　×　×

セーラ「ジ、ジャンプ！（走る）」

×　×　×

そのポニーが、嬉しそうにいななく。

振返るピーター——

ピーター「お嬢さん……！」

駆け寄って来るセーラ——

セーラ「ジャンプ！……やっぱり、あなただったのね！」

ジャンプ、更に嬉しそうにいななく。

突然、座席で、鳥篭に入ったオウムが叫ぶ――

声　「セーラ……セーラ……」

セーラ「まあ、ボナパルトまで……一体どうやって……」

セーラの背後から、ステッキのクリスフォードが、ラムダスと微笑で近づいて来る。

クリスフォード「このピーター君から以前の事を聞いてな。カーマイケル君が探し出して来てくれたのだよ」

カーマイケル「（微笑）正直云って、ロンドン中探すのは、相当に骨が折れましたが」

セーラ「まあ……」

ピーター「さ、お嬢さん、乗ってみて下さい」

セーラ「ええ……小父様もどうぞ！」

クリスフォード「では、ひと廻りしてみるかな」

セーラ、クリスフォードに手を借す。続いて自分も乗り込む。

ピーターが御者台にあがると鞭を鳴らす。
いなないて走り出すジャンプ――
× × ×
馬車は、女生徒たちの歓声をあとに、スクエア脇の雪
道を走って行く――

12 街の通り

走るその馬車――

13 走る馬車の上

突然、セーラが一方を見て叫ぶ。
セーラ「あ、ピーター、お願い、馬車を停めて！」
ピーター、驚いて馬車を停める――

クリスフォード「どうしたんだね、セーラ」

セーラ、馬車の停った先のパン屋の店を凝視している

――

セーラ「このパン屋さんのおばさんなんです……私が、ひどくおなかがすいていた時、助けて下さったのは」

クリスフォード「ほほう」

セーラ「私、あの時のお礼を……」

クリスフォード、頷く――

14 パン屋・店内

クリスフォードと入って来るセーラ。

「いらっしゃいま……」と、云いかけたパン屋のおばさんが、驚いてセーラに気づく。

おばさん「あ、あんたは……あの時の……」

セーラ「まあ、私を憶えていて下さったんですか」
おばさん「ええええ、忘れるものじゃありませんとも……けどまあ、
立派におなりになって……そうそう、あなたにお引合せ
する子がいるんですよ……（奥に呼ぶ）アンヌ！……ア
ンヌ！」
「はあい、ただいま！」と、明るい声がして、出て来
る店働きの少女アンヌ——
二人、互いに見て、愕然となる——
セーラ「あ、あなたは……」
アンヌ「あんた様は……」

15

フラッシッ（23話より）
貧しいアンヌに、パンを分け与えるセーラ——

16

パン屋の店内

アンヌ「……ええ、あれから私、このお店に引取られて、働かせて頂いてるんです」

セーラ「まあ、そうだったの」

セーラ、おばさんに向き直る

セーラ「ほんとに、あの時は、私たちを助けて下さって、有難うございました。私、そのお礼に……」

おばさん「とんでもない。この子を助けたのは、お嬢さんですよ。だって五つのパンを四つまでこの子にあげてしまうなんて、私もう胸が一杯になってねえ」

セーラ「まあ……でも、困ったわ、どうやって、あの時のお礼を……」

クリスフォード「（微笑）こうお願いしては、どうかな、セーラ……つまり、これから先、以前の君達のように、お

なかをすかして困っている子供達を見つけたら、十分にその子達にパンを食べさせて頂く……勿論、その費用は、この私が払わせて頂くのだが」

セーラ「わあ、素晴らしいわ、小父様！」

おばさん「だ、旦那様！……それじゃ、うちで売るパンが、毎日売り切れになってしまいますですよ」

クリスフォード「（微笑）勿論、それで結構」

おばさん「ンまあ……」

思わず笑うセーラ、アンヌ、クリスフォード、おばさんたち――

17 ロンドン橋の見える風景

セーラのN「クリスマスから間もなく、私はクリスフォード小父様と、インドに旅立つ事になりました……それは、お父

様の遺産を正式に引継ぐ為と……お母様と眠っている
お父様のお墓に、お参りする為でした……」

18

波止場

旅装のセーラを囲んでいる女生徒たち。

ロッティ「ね、セーラ・ママ……インドへ行ってもう帰って来ないの？」
セーラ「（微笑）帰って来るわ。四ケ月程したら、きっとまた逢えるわ」
アーメンガード「よかった！　またフランス語、教えて貰えるのね」
ガートルード「でも、その頃は、ラビニアはいなくてよ」
セーラ「え、どうして？」
ジェシー「ラビニアはね、アメリカへ帰っちゃうんですって」
セーラ「まあ……」

ラビニア、微笑で肩をすくめる。

ラビニア「残念だけど、あなたとは、もう二度と逢えなくなるわね」

セーラ「いいえ、そんな事はないわ。いつかきっと逢える時が来るわ」

ラビニア「フフ、きっと何十年も経って、あなたが、ダイヤモンド・プリンセスから、ダイヤモンド・クイーンになった頃にね……その頃は、きっと私、アメリカ大統領夫人になっていると思うけど」

セーラ「（微笑）まあ……」

その時、駆けつけるイライザ小母さん。

アーメンガード「イライザ小母さん！」

イライザ「セーラさん！……あなたがインドへ立つと聞いて、船酔いの薬を作って来たのよ……はい、これ」

セーラ「まあ……有難う、おばさん」

そこへドナルドとジャネットが駆けて来る——

ドナルド「セーラさん、もう船に乗る時間だよ」

ジャネット「クリスフォード小父様があちらで待っていらっしゃるわ！」

セーラ「ええ、今行くわ！」

×　　×　　×

船の汽笛が——ボウッと鳴る。

（以下モンタージュ）

タラップを上って行くクリスフォード、セーラと、小さなスーツケースを提げた旅装のベッキー、続いて大型トランクを担いだラムダスと二人のインド人。

×　　×　　×

波止場で、手を振るカーマイケルと夫人、ドナルドとジャネット——その脇に、例の洋服屋の主人が手を振っている。

×　　×　　×

甲板で、手を振るセーラ――

×　×　×

波止場で、手を振るミンチンと――アメリア。

×　×　×

フラッシュで――形相凄まじく手を振上げるミンチンと、オロオロするアメリア。

×　×　×

波止場で、その二人がニコニコと手を振っている――その脇で、手を振るアーメンガードとイライザ小母さんに抱かれたロッティ。

手を振るラビニア、ジェシー、ガートルード以下の女生徒たち――

×　×　×

甲板で、手を振るセーラ――その眼に涙が溢れて来る。

×　　　×　　　×

波止場の一角で――荷馬車の荷台に立ったピーター

と、煙突掃除の少年、ガラス修理の少年、マッチ売り

の少女たちが手を振っている。

ピーター「（叫ぶ）お嬢さあん……早く帰って来て下さいよォ！」

×　　　×　　　×

甲板で、手を振るセーラとベッキー。

何度も涙の顔で頷く――

ボウッと――つんざく汽笛。

19 テームズ河の風景

巨大な客船が、ゆっくりと岩壁を離れて行く――

セーラのN「行って来ます、ピーター……そして、ミンチン学院の

皆さん……私は今、泣いています……いいえ、悲しく

てではありません……今日まで皆と過した日々が、今、
次々に思い出されて、それで……それで……」
甲板で、涙を拭うセーラ――
セーラのN「でも、もう泣いたりしません。間もなくきっと又、皆
さんと逢えるのですもの……じゃ、皆さん、お元気で
……」
ボウッと、汽笛――
その巨船が遠く出航して行く――

（終）